



三点観測とハムスターの回転車

著者	臼山 利信
雑誌名	外国語教育論集
号	41
ページ	iii-iv
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155075

三点観測とハムスターの回転車

CEGLOC外国語教育部門長 白 山 利 信

恋人同士が見つめ合う。美しく自然な光景である。当事者の男性も女性もお互いに相手の顔以外は目に映っていない。周囲の人や風景が見えているのに見えない、音も聞こえているのに聞こえない。「恋は盲目」なのだ。なぜ盲目なのか。それはおそらく恋に夢中になりすぎると、相手をひたすら直視し続ける状態から抜け出せなくなるからだろう。相手が運命の人で本当に文句のつけようのない良い人ならばハッピーエンドだが、もしも相手が結婚詐欺師だったら大変なことになる。そこで大切なのが、盲目リスクの回避に力を発揮する第三者の目である。例えば、自身の両親、兄弟、親戚、恩師、親友など信頼できる人に自身の恋愛の状況を伝え、第三者の立場から分析・評価してもらうのである。言わば、自らの恋愛の客体化を行うわけである。

一般論として、個人にとっても組織にとっても自らの行動や活動の是非などについて、第三者のフィルターを通して厳しい指摘を受けることは、決して心地良いものではない。自らの弱点、欠点、不備などの指摘を直に受けることは、ある意味で勇気のいることだ。自らが良いと見なしていることと第三者の見解が異なるということが実際にはよくある。その場合、再度自己点検と自己評価を行い、必要に応じて適宜行動様式を改めていかなければならない。

現在、大学では教育活動の第三者評価を受けることが当たり前になっている。筆者が実務責任者を務める、文部科学省のグローバル人材育成事業の一つである大学の世界展開力強化事業（ロシア）・筑波大学「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」（平成26～30年度）でも外部評価委員会による第三者評価を毎年受けている。カリフォルニア大学サンディエゴ校教授、国際協力機構理事、外務省欧州局ロシア課日ロ経済室長、ロシアNIS経済研究所副所長他の有識者を招き、年度末に外部評価委員会を開催しているが、毎回非常に手厳しい指摘を頂戴している。だが、そのお蔭で、例えば、派遣学生の留学先での活動に伴う事故、病気・ケガ、災害時などのアクシデントに対する同プログラムの危機管理体制がより充実したものになった。まさに「良薬口に苦し」である。

信頼できる第三者の目というのは、単線的なものの見方や考え方によって当事者が硬直化し負のスパイラルに陥った場合に、複線的な視点をその当事者に提供し、思考の柔軟性を回復させてくれる。複眼的な視点は、多くの場合、第三者からの提供によって獲得される。しかし、常に第三者である外部の者によってもたらされるわけではない。当事者自身の知的訓練や経験などによって、もともと単眼的であった自己の内なる視点を複眼化することが十分可能である。つまり、当事者の胸奥に内なる「自己」と内なる「第三者」を育て共存させることができるのである。文化

人類学者の川田順造氏は、これまで何十年にもわたって「文化の三角測量」という考え方を提唱している。これは異なる三つの文化圏に身を置き、現地のもの見方、考え方、感じ方などを身につけ、それぞれの地点から相互にあらゆる文化的事象を相対化して機能的・構造的に理解することである。今から27年ほど前、筆者が東京外国語大学大学院修士課程に在籍していた時、当時同大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授であった川田氏が公開講演会で「文化の三角測量」の重要性について言及し、「測量地点は2点では不十分で3点以上なければならない」と力説していたことをよく覚えている。「文化の三角測量」という考え方は、まさに当事者自身の中に三つの異なる内なる「自己」を育てあげ、互いに異なる三つの視点から物事を捉え考えることに他ならない。

「文化の三角測量」的な世界観の構築は、グローバルな移動を伴う中で培うことが理想だが、そうした移動がなくとも日本国内で部分的に涵養することは可能である。それは異なる三つ以上の言語学習である。本学の一般的な学生にとっては、(文化的事象の学習を含む)日本語、英語、そして初修外国語の学習である。三つの異なる言語を修得する中で言語間の機能的・構造的な差異や特徴を理解する過程で、三つの言語を相対化することができる。この「言語の三角測量」とも言うべき相対化作業の蓄積こそが複眼力の獲得・伸長に繋がるのである。言語の相対化の一例として、語順の自由な日本語とロシア語を学べば、英語の語順が固定されているのは英語には文の構成要素間の関係性を示す格表示形式が存在しないためだとすぐに気づくことが挙げられよう。

さらに、第三者的な複眼的思考が鍛えられると、自身を客観視するメタ認知能力が自然に高まる。言い換えると、空間的に自分を見下ろす形での俯瞰力、すなわち、自分で自分を客体視する力が身についていく。言わば、巨視することであるゆる領域における自らの立ち位置、課題や展望などを立体的に描けるようになるのだ。現代人の生活において、鳥瞰図的な巨視という認知のあり方は、自身を取り巻く全ての物事・事象を深く分析し、適切に理解する上で必要不可欠なのである。

その意味で現実生活の中では、ただ目の前の一点を直視してゲージ内の回転車でひたすら走り続けるハムスターのような状態だけは回避したいものである。